

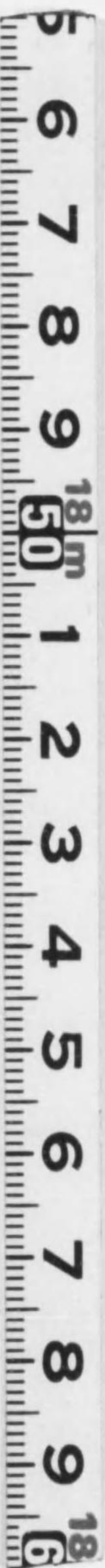
特 253

270

柘植信秀著

眞宗の安心問題

中央佛教社發行



始



特 253  
270



著 秀 信 植 柘

眞宗安心問題

中 央 佛 教 社 發 行



## 眞宗の安心問題

柘植信秀 著

眞宗は何を問題とするか

浄土眞宗は何を問題として起つたか、この質問に正しい答が與へられれば、眞宗そのものの本質と、信心の本體が明確に領解されます。そればかりではなく、問題に對して答へる自分自身のすがたが、はつきりとわかるやうにもなれる。

正しい問題には、正しい答へが要る、問題と答へとが一致しなければ、機受の安心も、一教の本質も、自分の心のすがたも、本當にわかるものではない。それゆへまづ問題を提げて、はつきりとその質問に答へやうとすることが、信心を得やうと

する求道者の眞摯の態度であると思はれます。

### 苦惱は問題をうむ

苦しみのない人には、問題は起らない、悩みのないものには、質問はない。問題と質問とは、本當に人生に苦しみ、自分に悩んだ人が、もつところの力ともいへると思ひます。

無論、すべての人は何にかの問題と質問をもつてゐる。また悩みと苦しみをもつてゐる。しかし、その苦しみといひ、悩みといふものが、それが道徳的であるか宗教的であるか、乃至は精神的であるか、物質的であるか、一言にそれは悉く、生きる悩みであるとしても、現代の多くは物のための苦みであり、肉のための悩みが人生苦惱の中心であります。

人生の苦惱の中心は、結局生きることの矛盾でありて、それは所謂生老病死の苦惱そのものではないでありませうか。老病死の苦惱は、それは自然が人間に與へた動がせない鐵則ではあるけれども、そこに種々雑多の矛盾のすがたを感ずるので、生きることの苦惱を能感するのであります。

のがれられないことをのがれやうとし、さけられないことをさけやうとする所に一層生の矛盾を感ずるのではあるが、それは生きやうとする人間の肉の悩みでありて、永劫にとりさることは、容易にできないとしても、矛盾は矛盾のまゝに、そこに自然の調和がありて、矛盾を感じながら、しかも矛盾ならざる生活を生活するところが、信の世界でありませう。人生の種々相の矛盾を感ずるのは、我が心である、その我が心の世界に調和のゆとりのできることが宗教の天地なのである。現代はその矛盾を感ずる我が心の悩みを、いかにして除去すべきであらうかと思慮せず、その矛盾は社會そのものの矛盾であり、生そのものの矛盾であると偏する所に、却つて肉の悩みが起り、生きることの苦みが多いのであらうと思ひます。

四  
そういふ人生の苦惱を心の問題として、自覺の問題として、靜かに深く思惟することは、やがて宗教的自覺に在る第一歩であります。我が淨土眞宗は、かういふ人生の苦惱を問題として起つたものであらうか。勿論、宗教は人間の苦惱を救ふために起つたものだともいへるが、眞宗の中心問題は、そういふ主觀の問題よりは、救ひといふ客觀の力を仰ぐことを中心とするやうに私は思はれるものであります。

### 問題は彼岸の淨土か

淨土眞宗の問題は、客觀を主とするといふならば、それは彼岸の淨土を中心とするのか、或はこの人生を中心とするのか、またはそのどちらを問題とするかと。かういふ質問を私は私自身に話しかけて、その答へを求めたのであります。いふまでもなく、淨土眞宗の信仰の窮極は、阿彌陀佛の淨土に往生することを以て、無上の極果とし、無爲涅槃の妙境として、その往生を期するのであるから、一

應は淨土往生が問題の中心であるやうである。況やすべての人間の宗教的要求として、彼岸の世界を願求することは、永遠の理想を求めやうとする人間性の最後の要求であります。それは欣求淨土、厭離穢土の思想から必然に起りてくる淨土思想の歸決なのであります。

しかし、こゝで往生淨土の思想を再び検討しなければならぬことは、その彼岸の淨土に生れんと願ふ私の思ひは、此岸の人生に於ける老病死の苦みと、それから催される煩惱罪濁の惱みの苦勞を断ちて、法性常樂の滅度に生れやうとする思ひの本は、結局此岸の人生の方が惱みの根本であるから、彼岸の世界の方は、後から要求された問題であつて、先決の問題は、人生の苦惱が中心であるといふこと、それから、また深く自省すれば、私自身が本當に心の奥底から、この人間の煩惱罪濁の苦みを苦みと思ひこみ、老病死の惱みを本當に惱みとする眞實の苦惱があるか、どうか、それは恐らく、たゞ順逆二境の客觀的狀勢に、吾が心の左右されたと

きだけの、淺薄な思ひではないかと自分が自分に質してみると、欣求淨土も、厭離穢土も、自分の都合の問題にすぎないといふことが暴露されると思ひます。

もすこし、明かにいつてみると、死後のたのしい淨土を願ふといふ心は、安穩とか、受樂とか、無爲とか、快樂とかいふ淨土の風光を誤りて巧利的に要めてゐるのではないかと思ふこともあり、また、老病死を厭ひ、煩惱罪濁をのがれやうとする要求のうちには、他力眞實の信心を涉世道德の方便に利用しやうとする虚假の思ひがあるのではないかとも考へられます。如來の眞實心といはれ、超世の大安心といはれる回向の信行を、そんな巧利的な涉世的な道具に使ふことは、如來の純粹行としての名號に歸順投托する態度ではないと思ひます。

それならば、そういふ虚偽の心や、巧利の思ひを打ぐだいて、純眞純淨の心にかへらなければ、信仰は得られないといふのか、それは煩惱罪惡のものを、そのまゝ救ふてくたされる如來の大慈悲の前には、あり得べからざることである。いひか

へれば人間心のまゝの救ひであるから、心の問題は、淨土眞宗に於ては、むしろ問題としていないといふ方が適切であります。

たゞふかくねからべきは後生なり、またたのむべきは彌陀如來なり、信心決定してまいるべきは、安養の淨土なり。(御文章一ノ十一)

たゞねがうべきは極樂淨土、たゞたのむべきは彌陀如來なり。(御文章三ノ四)

必至ニ無上淨信曉ハ、三有生死之雲晴、清淨無碍光曜朗、一如法界眞身顯 (文類聚抄)

若人丕發ニ善提心ハ、但聞ニ彼國土受樂無間ニ故願レ生亦當不レ得ニ往生ニ也 (證卷引文)

念佛成佛これ眞宗、萬行諸善これ假門、權實眞假をわかずして、自然の淨土をゑぞしらぬ。

佛法をあるじとし、世間を客人とせよ。(御一代開書)

人間は不定の世界なり、極樂は常住の國なり、されば不定の人間にあらふよりも常住の極樂をねがうべきものなり。(御文章五)

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらこと、たわこと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにおはします。(數異抄)

たゞし人界の生はわづかに一旦の浮生なり、後生は永生の樂果なり、たとひ榮華にほこり、榮耀にあま

るといふとも、盛者必衰命者定離のならひなれば、ひさしくたもつべきにあらず、たゞ五十年百年のあ  
いだのことなり。(御文章二)

また浄土へいそぎまへりたきこゝろのなくて、いささか所勞のこともあれば、死なんざるやらんと、こ  
ころほそくおぼふることも、煩惱の所爲なり。久遠劫よりいままで、流轉せる苦惱の舊里はすてがたく  
いまだむまれざる安養の浄土は、こひしからずさふらうこと、まことによくよく煩惱の強盛にてさふら  
うにこそ。(歎異鈔九)

極樂無爲涅槃界、隨緣雜善惡離生、故使如來選要法、教念彌陀專復專。(法事讃)

### 心の解脱か

彼岸の浄土を問題として、眞宗は起つたのではなく、また人生を問題としてでも  
ないとすれば、どうも心の問題が中心であるやうに思つても見た。そんなら眞宗  
ではその心の問題を、いかに取扱つて居るかと考へてみると、別段この心を、かう  
直せとも、あゝ改めよともいはれない、たゞこの機のまま、この心のまままで救は  
れるのだといはれる。それを直そうとか、改めやうとかする心の動きは、却て計ら  
ひとなり、累らひとなり、情謂となりて、如來の眞實の信仰に入ることとはできぬと  
いはれる。

この機のままとは、人間性得の機のままであるから、煩惱罪濁のこの機のまま  
喜怒哀樂のこの心のまま、すなはち現在の心のなりで救はれるといふ。してみる  
と心の解脱といふことも、眞宗の起つた問題の中心ではないといふことになる。そ

うすれば私はこの現在の見苦しい心を畢竟どうすればよいかと、自から質問し、深く考へねばならないのであります。

それは、この現在の心をどうすればよいかといふ問題は、それは道徳的律法的分際の際に属する問題で、慈悲の救ひの宗教の問題ではないと如来の慈悲に甘へてみたいのである。さらにいへば、それは唯、道徳的の苦惱でありて、私の現在の心の悩みは、まだ宗教的な眞實の苦惱ではないのであるといへます。自分の現在の心の非道徳的な動き、といふよりは、その心のどうにもならない不完全の本性を少しでも知つてゐながら、あくまで、その本性をつくらひ、よそほひ、たぶらかし、ごまかして、道徳的な生活にならうとする虚假不實の我れなればこそ、眞實の宗教的苦惱には進み得ないのであると思はれます。そういふ心を根本から打やぶつて、自分の本性にめざめることが、他力におまかせする第一歩でありませう。もし此の心をかう直せ、あゝ改めねば救はぬといふ如来であつたら私は永久に救はれないのであります。

であります。

總別、人にはおとるまじとおもふ心あり、此心にて世間には物もしならうなり、佛法には無我にて候へば人にまけて信をとるべきなり。(御一代開書)

まづ當流安心のおもむきは、あながちわがころのわるきをも、また妄念妄執のころのおこるをも、とどめよといふにもあらず、たゞあきないをもし、奉公をもせよ、獵すなとりをもせよ、かゝるあさましき罪業にのみ、朝夕まとひぬる我れらこときのいたづらものをたすけんとちかひまします彌陀如来の本願にてましますぞとふかく信じて、乃至かならず如来のおんたすけにあづかるものなり。(御文章一)

妄念は凡夫の自體なり、妄念のほか別に心なきなり、臨終のときまでは一向妄念の凡夫にてあるべきなり。(横川法語)

愛欲も名利もみな煩惱なり、されば機にあつかひをするは難修なりと仰せられ候なり、たゞ信ずるほかは別のことなしと仰せられ候。(御一代開書)



## 道德的苦惱より宗教的苦惱へ

眞實の宗教的苦惱とは、端的にいへば、自分の現在の心といふよりは、すでに久遠の心から道德的にもなり得ない自分でありながら、猶その上宗教的になり得たいと思ふ、虚偽と虚飾との自分の非宗教的本性に苦惱することであります。それは我が道德的不完全の本性にめざめるとともに、また、宗教的に不完全な自性に自覺することではないかと思はれます。別の語でいへば、助からぬ自分、救はれぬ自我に悩むことではないかと思はれる。助からぬ、救はれぬ自分に悲泣して、自我の宗教的不完全の本性に悩むことが、眞實の宗教的苦惱といふならば、結局一切の衆生は永久に救はれぬことにはならないか。然り、その永久に救はれぬ自分の眞實にめざめなければ、本當に永久の救ひは見出されなと思ひます。永久の救ひは、永久に救はれない自分の眞實に徹したものにのみ感激されるのであります。感激は信仰の

すがたではないが、當然救はれる自分だといふ自負的の態度と、救ひを要求する態度とは、必然的に救はれない自我のすがたであります。いはんや我れの自性そのものは、たゞ煩惱罪濁の肉塊としての存在でありて、それが無始己來の必墮無間のすがたではないかといはれる。げに落て行くこの必墮無間のすがたこそ、七寶の蓮臺へ生れでる自己なのでありませう。それは悪を轉じて善と成し、障はりをそのまゝ、徳と變へ成す不可思議の悲願だからである。

この不可思議の悲願海には、我が心の問題は、無用であります。個我の凡心に届托してゐては、廣大の願海は認識し得られない、それはどんな毒でも、悪でも、罪でも、障りでも、そのまゝに流れこんでれば自然に一味となす徳があるからであります。そこで相對差別の醜惡な人間心を解脱しきれぬ凡小の心の問題などは、絶對の願海には問題とならない問題である。かくして淨土も、人生も、心も問題でないとするれば、眞宗は抑も何にを問題として起つたのであるか、私は退いてそれ

を我が心に質して考へねばなりません。

一四

行者のはじめてともかくもはからはざるに過去今生未來の一切のつみを善に轉じかへすといふなり、轉ずといふは、つみをけし、うしなはずして善になすなり。よろづの水大海にいりぬればうしほとなるがごとし。(唯信抄)

悪性さらにやめがたし、こゝろは蛇蝎のごとくなり、修善も雜毒なるゆへに、虚假の行とぞなづけたる。(悲嘆述懐讚)

竊推斯心、一切羣生海、自從無始已來、乃至至今日今時、穢惡汚染無清淨心、虚假誑偽無眞實心、是以如來悲一切苦惱衆生海、乃至成就圓融無碍不可思議不可稱不可說至德。(信卷)

聖人仰せられ候ひしに、當時後世者振りして、よからんものばかり、念佛まふすべきやうにおもひ、或は道場に張りぶみをして、なむなむのことしたらんものをば、道場へいるへからすなるといふこと、ひとへに賢善精進の相をほかにしめして、うちに虚假をいたけるものが、願にほこりてつくらん罪も、宿業のもよほすゆへなり、さればよきこともあしきことも、業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいらすればこそ、他力にては候へ。(歎異鈔一三)

蛇蝎奸詐のこゝろにて、自力修善はかなふまじ、如來の回向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせん(述懐讚)

根機つたなしとて卑下すべからず、佛に下根をすくう大悲あり、行業おろそかなりとて、うたがうへからす經に乃至一念の文あり、(執持鈔)

夫、十惡五逆の罪人も五障三障の女人も、むなしくみな、十方三世の諸佛の悲願にもれて、すてはてられたる我れらごときの凡夫なり、(御文章二)

## 信後の道德生活

一六

念佛行者の倫理思想と、その道德生活とは、如來の眞實心に安住せしめられた一念慶喜の信の思ひの延びたすがたであります。信前に於ける道德生活の悩みは、それは自力作善の思ひからなされる自恃の行爲であるから、それはまた、善を作して善を恃まうとする所謂植諸徳本の心であらう。善を作して、我れは善を作し得たりと思ふならば、それは眞實の善にあらずして、僞善に屬するものであるといはれる他力信仰の生活に於ける道德は、報恩感謝の思想から、必然的になされる道德でありて、それは我れ自から善を行ひたりといふ善に對する自負の思ひや、爲さねばならぬといふ律法主義の心構へや、作す勿れといふ良心の命令によりて爲作する道德ではなくして、それはたゞ如來の回向による信心のよるこびの報恩感謝のすがたそのものにほかならぬのであります。そこには道德を實踐するといふ道德的觀念の動

きは毫末もない。まして作す勿れといひ、せねばならぬといふ命令のあらう筈もない。知らず識らずのうちに自から帝の則りに契なはしめられた無我の道德であり、忘我の實踐であります。別言すれば他力信仰の道德化であり、絶對から起さしめられる慚愧懺悔の生活である。それはまた私といふ小さい我れの上に顯現された如來の大我のすがたでありて、その大なる力に我れを忘れて引きづられてゆくこそ他力信仰の生活といふのであります。

信爲道元功德母、長養一切諸善法、斷除疑網出愛流、開示涅槃無上道、信無垢濁心、清淨滅除憍慢、恭敬本、乃至信於境界無所著、遠離諸難、得無難、信能超出衆魔路、示現無上解脫道、(信卷引文)  
守護地頭に於ては、かぎりある年貢所當をねんごろに沙汰し、そのほか仁義をもて本とすべし、(御文章三)

佛法には無我と仰せられ候、われと思ふことはいさゝかあるまじきことなり、われはわるきをもふひとなし。

王法はひたへにあてよ、佛法は内心にたくわへよ、(御一代閉書)  
一念をもては往生治定の時刻とさだめ、そのときの命のどれば、自然と多念にをよぶ道理なり。(御文章)

## 本願の誓約による信後の形態

もし、信後の内部生活に、延いてはその外、面生活に信心獲得の境地と、その生活形態があり得なければならぬとすれば、それは本願の誓約である乃至十念の正定業としての報恩行である稱名念佛の相續の形態と、その念佛から反省せしめられてくる深刻な自分の罪惡感の心境であらうと思ひます。その罪惡の自省といつてもたゞ現在、生きて居るうちだけの罪惡感ではなく、過現未の三世を貫いて、無始以來から今日今時まで拂ひ取ることのできない自己の罪禍に自覺し、自省せしめられなければならぬと思ふ。極言すればそれが人間としての本質だといふことに深く氣付かしめられるのでなければなりません。この自覺こそ、自己の道徳的、宗教的不完全の自覺であつてそれは他力救済の感激の源底でもあります。

いひかへれば、本願の救ひは、この不完全の現實と、罪惡の自己とに向て、何にらかなの形に於て、どうか完全にしてやりたいといふ如來の願心の現れたものであります。罪惡の深い自省は、不完全の自分を完全に進めてくださる、所の第一歩であります。また、救済の感激は、不完全の現實のまゝに差別の人生のまゝに、不足なく、不平なく、難有く法悦し、感謝し、讃仰して、このまゝの現實を迎へやうとする心境であると思ひます。それは信後の生活形態として、勿論、一定されたものではないけれども、本願の誓約を憶へば、當然左様にあるべきことだと思ふが、然し、各人の個性と、その宗教經驗としての體得とは必ずしも一樣でないといふ事實も、認めなければなるまいと思ふ。またしても自分の理窟がでたやうですまぬことであります。

さてこのうへにこころふべきやうは、とき／＼念佛を申してかゝるあさましきわれらを、たやすくたすけます。阿彌陀如來の御恩の御うれしき、ありがたさを報ぜんために念佛申すべきなり。(御文章五) 淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたし、虚假不實のわがみにて、清淨の心もさらになし。(和讃) さらに一念も本願をうたがうことゝろなければ、かたじけなくもそのこゝろを如來のよくしるしめして、すでに行者のわるきこゝろを、如來のよきおんこゝろと、おなじものになしたまうなり。(御文章二)

## 信ずるが故に救はれるか

信ずるが故に救はれるといふことは、宗教の信仰の常識的考へである。それは信ずるが故に如來ありといひ、淨土ありといふこと、同様の信じ振りであります。淨土眞宗に於ける絶對他力の信仰は、そいふ常識的の信ではなく、まへのべた通り、名號そのものの回向が信心であるから、信ずるが故に救はれるといふのではなく、救はれるに間違ひないと名號のいはれを深く信ずるのであります。いひかへれば救ひの名號法にありて、我が機を信知せしめられてかならず救はれると信ずるのであります。

それは我が信心が先手にあらずして、救ひの方が先手であることを意味するのであります。なほいへば信ずるが故に如來が在しますのではなく、如來在しますが故に、本願の名號あるが故に信心が回向されるのであります。それは如來から衆生へ

の下向ともいへませう。

しかも、信じられないと惱んでゐる私どもは、信心を我が意業の認識にありとし、我が心の信ずる力にありとして、信じやうと考へてゐるから素直に受取れぬのである。それは如來の救ひの方を忘れて、信じやうとする自分の手許の方に信じ心をこしらへるからである。それは所謂計らひてありて、信順と歸投の全部を見忘れた自力的態度であります。我が信じ心の問題は、問題として少しも考へない所に他力の信心はいたゞかれるわけであると思ひます。そこに他力信心の特異性が嚴存するのであります。

由來信仰の世界を以て、何にか特殊の境地があらはれ、自分の心境が全然一變するものであらうといふ空望を以て、信心の境地を得やうとする人は多いが、本當に眞實に彌陀佛の救ひを頼まれて安心した人は少くないのであります。信心の境地といふものは、觀念空想の世界ではなく、現實の何にかについて信味を味ふ世界であると

思ひます。それは丁度日本人の生活に於て毎日米の飯を食はなければ、食事をした様な心持ちになれないと同様の味ひであると思ひます。米の飯の味ひを明確に「ふ」とはできないが、米がなくては生きられないのが日本人であります。甘いとも、辛いとも、酸いともいへないが、これにはいふことのできない味ひがあるやうに、信心の境地といふものも、特殊の世界ではないとしても、そこには何んともいへない味ひの世界があると思ひます。その味ひといふものこそ、救はれた境地であります。

言信心者則本願力回向之信心也。(信卷)

無徳號慈父能主因欠、無光明悲母所生緣垂、能所因緣雖可和合、非信心業識、無到光明土。(行卷)

信心すなはち一心なり、一心すなはち金剛心、金剛心は菩提心、この心すなはち他力なり。(和讃)

言眞實者即是如來、如來即是眞實。(信卷)

斯至心則是至德尊號爲其體也。(信卷)

## 信心の境地

もし、信心の世界を平生の生活のほかに、信仰の境地を平常心のほかに求めるために、救ひを得やうとするならば、それは信心の對象と、信心の中心を淨土の證りなるものに寄せてゐるか、また不可見の佛體にか、自己の凡心の解脫にかおいているのであります。いふまでもなく、淨土眞宗の信心の中心は、本願の行である如來の御名であるから、念々稱名常懺悔の念佛の生活こそ、信心の世界であります。念々稱名の世界とは、まさしく定められた往生の業をよろこびつゝ、自己を反省する稱名の生活でありて、それは法體たる名號が、そのまゝに稱名するものの口にあらはれた絶對の風光であります。法體としての名號は、法身常住の絶對境から無常變易の相對界へその法身の全徳を回向するのが、名號の力用であるから、南無阿彌陀佛といふ六字には、法身の徳を内容し、かつ表現せしめられてゐるので

あります。勿論、文字は消滅の方則を免れず、また、文字によりて、救はれるのではないけれども文字によらなければ、如來の願心の表現も、絶待界の風光も、私達には伺ひ知ることができないのであります。言ひすぎるかも知れないが、文字は月を指す指であります。文字を通して如來願心の月の光りを仰ぐことが、信心であります。斷はりてをくが、名號の成就は、同時に正覺の報身の成就ではあるけれども、私の法身と申してゐることは、彌陀の報身は、すなはち法身のこと、本山下附の御影の裏書にも、方便法身の尊形として奥書されてあるのを見ても一個の私見ではないと思ひます。むしろそこに淨土眞宗の特別な如來觀があることも伺はれます。

兎に角、信心の世界を、信仰の境地を、特殊の存在として思考することは、そこからいろいろの邪見も起り、迷信も起り、感覺も生じて、純粹から混迷へまぎれこむことになり易いのであります。親鸞教の存在は、そらいふ混迷から、邪信から、

はるかに超出して、純一無雜の深信に生活することが目的なのであります。教行信證の四法の法門は、まさしくさういふことの批判であつたわけを忘れてはならないのであります。

しかれば報身といふ名言は、久遠實成の彌陀に屬して、常住法身の體なるべし。(口傳鈔)

一心決定のうへ、彌陀のおんたすけありたりといふは、まじりのかたにてわろし、たのむところにて、たすけたまひ候事は、歴然に候へども、御たすけあらうずといふて、しかるべきの由仰せ候。(御一代聞書)

まづ凡夫は、ことににおいてつたなくおろかなり、その奸詐なる性の實なるをうつみて、賢善なるよしをもてなすは、みな不實虚假なり、たとひ未來の生處を彌陀の報土とおもひさだめ、ともに淨土の再會をうたがひなしと期すとも、おくれさきだつ一旦のかなしみまとへる凡夫としてこれなからんや、(口傳鈔)

信心治定の人は、誰れにもよらず、まづみれば、すなはちたうとくくなり候、これその人のたうときにあらず、佛智をえらるゝがゆへなれば、いよいよ佛智のたうときほどを存すべきことなり。(御一代聞書)

## 救ひとは信の回向なり

信心といふ何にか特殊の境地も、能く感覺的につかまれないのが、眞實の信仰だとは承知していても、私には彼岸の浄土へ生れたいと思ふことが、時に心の頭を切々ともたけてくるときもある。勿論、それは若くは不生者、不取正覺といふ本願の誓約であるから、自然に往生を願ふ心が起るのであらうけれども、それが直に救はれたといふほどのものではないし、また、救はれたしるしとも、無論いへないのでありませう。

なぜかといへば、お浄土へ生れたいといふ願ひは、信のない人でも願ふことでもあります。信心のある人ならば、生れたいと願はんでも、まへらせて下さるものであるから、願生といふことは、救ひの眞實の意味ではないと思ひます。それに生れたいといふ願ひは、利己の要求に近いのであるとすれば、それは、眞實の他力に打

任かせた純な態度ではないと思はれる。それなれば何にを救ひといふか、お助けといふか、私にまづかやうに質しつゝ、かやうに答へて見たのであります。それは、救ひとは信の回向されたことではないかと、また本當に彌陀をたのまれた自分の落ちつきをいふのではないかと。

それは本願の三資糧といはれる至心信樂欲生の信と、若くは不生者不取正覺の願と乃至十念の行との三つの誓約を、たゞ信樂の無疑の一心に結歸せしめた、その十八願を至心信樂願と示された高祖聖人のおぼしめしを伺へば、他力の救ひといふことは、たゞ深く彌陀をたのまれた無疑の一心といふことのやうに思はれます。それは本願の御文を成就文から拜見すると一段と明瞭に伺へるのである。願文の方では若くは不生者不取正覺とある當來の往生といふお救ひが、成就の方では、聞其名號信心歡喜乃至一念即得往生住不退轉とありて、信心の回向されたときが、すなはち往生の決定したときで、それが救はれたときであるとのことのやうであります。そうすれ



ば未來の往生もお助けに違ないが、その往生は回向の信によりて得られる果報であるから、信心獲得の方が先に決定された即得往生のお助けといふことになる。往生淨土のお助けは現實に見へない未來の問題であるから、お助けあらうずるといふことになり、即得往生住不退轉の現益は、お助けありたることと信心歡喜するのであると蓮如上人は、お示し下されてある。そこに臨終往生にあらざる平生業成の宗意が伺はれ、また、本願名號の現實的意義のいかに存するかを味得せしめられることでもあります。この意味に於て本願のお助けといふことは、信心の回向されたところでありて、それは深く彌陀をたのまれた思ひにほかならぬと思ふのであります。

夫以獲三得信樂、發一起如來選擇願心、開闢真心顯彰從大聖矜哀善巧、(信卷序文)

言信樂者、則是如來滿足大悲圓融無碍信心海是故疑蓋無有間雜、故名信樂、即以利他回向之至心爲信樂體也 (信卷)

回向といふは、彌陀如來の衆生をおんたすけをいふなりと仰せられ候なり。(御代聞書)

憶念彌陀佛本願、自然即時入必定 (正信偈)

彌陀佛の本願を善知識よりきくについて憶念すれば、すなはちのとき往生さだまるなり、(執持鈔) 往生の心行を獲得するに、終焉にさきだちて、即得往生の義あるべし、假令身心のふたつについて、命終の道理相わかるべきか。無始よりこのかた生死に輪廻して、出離を希求しならひたる迷情の自力心の本願の道理をきく所にて、謙敬すれば心命のつくるときにあらずや、そのとき攝取不捨の益にもあづかり、正定聚のくらゐにもさだまればこれを即得往生といふべし、乃至しかれば臨終を期すべからざる義道理文證あきらけし (最要鈔)

救ひの世界は、宗教の極地であり、宗教的要求の理想的満足の境地であるから、それは求めつ、求められない境地ともいへるやうに思ふのであります。

### 感覺的の信ではない

感覺的とは、目に光明を見たとか、佛體を拜んだとか、淨土の莊嚴があらはれたとか、乃至は心に或る力が感受されたとか、いつたやうな自分の感覺の上に、或る作用が起つたことなどを意味することでありませぬ。あまりに當來の淨土をあこがれる生活には、得てかういふことが、あり勝ちであります。それらの意味に於ても、信心が淨土中心の信仰でないことは、いふを要しませぬ。

しかし、實際からいふと、信心の行者の願生にあこがれは、現實の生活問題よりは、よほど強烈である場合も見受けられます。それは現實の心の生活問題よりは彼岸の世界の未來生活の方が問題視されるからであります。いひかへれば道德的の悩みよりは、救はれるか否かの悩みに、より多く苦惱する方が、念佛者の多くの態度のやうであります。私はそこに今一段の素直な捨機托法の思ひと、それから信

樂住持の念とが、もつと深く思考されなければならぬと自分自身を反省するのであります。

救はれるか、否かの悩みのためには、却てそれが反對に道德的の悩みに苦しませばならぬことになりがちであります。そういふ人は、折角信仰を得やうと心がけつゝ、道德的宗教の範疇を踏み越すことのできない人でありませぬ。それと反對にまた或人は、道德を無視し、倫理を度外視して、救ひを得たといひ、得やうとしてゐる人もある。前者はこのまゝ救ふといふ、法の上に安住されないうで、救はれたと思ふ我が心の上に安住して、この心の變化を求めてゐるのであり、後者は、救ひの法の力に一切を荷負せしめて、自分の反省と自分の批判とを忘れきつてゐる態度であります。私はその兩方とも穩健な正しい態度ではないと思ひます。かういふことから、念佛者の倫理的な生活や、道德的の生活が問題視されて、社會的にも、宗教的にも、批難を受けつゝあるのだと思ひます。

一體、助かるか、助からぬかは、私の方できめることではないのであります。それは全く往生は本願の不思議といはれる通り、凡夫の計らうべき問題ではありません。その計られないことを計らうとする所から、覺感的に信を求めやうとするのである、他力の救ひは必然的であります。

必然的な信を覺感的妄想によりて得たと信ずるのは、それは如來回向の信心ではなくして、私の感覺によりて造り上げた妄信であります。來迎思想のやうなもの、まさしくその覺感的満足にすぎないものであります。

勿論、宗教一般から覺感的信をとりさることは困難ではあります、それが亡くなつた所に純粹の他力信仰が思ひ浮べるのであります。すべての人が來迎佛を拜み得ないので、本尊のみ手から、五色の絲を垂れさして、その絲をつかんで命終したといふ昔話しも、死に對する人間心理の微妙さを物語るものであります、親鸞教が常隨影護の來迎を示されたことは、尊いありがたいことであります。

來迎を期するなんと申すことは、諸行の機にとりてのことなり、眞實信心の行者は一念發起するところにて、やがて攝取不捨の光益にあづかるときは、來迎までもなきなりと知らるるなり。(執持鈔)

來迎といふは、來は淨土へきたらしむといふ、これすなはち若生者のちかひをあらはすみのりなり、乃至來はかへるといふ、かへるといふは、願海にいりぬるによりて、かならず大涅槃にいたるを法性のみやこにかへると申すなり。(唯信鈔文意)

## 禍福中心の信にあらず

端的にいへば、人生は善と幸ひとがいつも一致することのできない世界であります。それと反対に悪と禍ひとが、いつも多く行はれて、人々はその禍ひと不幸とに悩みをかさねてゐる世界であります。宗教の一面の役目は、さういふ禍ひと悪と、不幸と悩みとを人生からとりのけて、人々に幸福と善とを興へることに努力しなければならぬ責任があるといはれます。

しかし、これをとりよける方法については、宗教單獨の力だけではよく爲し得ないのでありて、それには勿論、國家經濟の力が最も重大な役割を持たされなければならぬのであります。宗教のそれに對する役目は、一口にいへば、禍と悪と不幸とに對する人々の思考と態度とを是正する所に存し、國家の役目は、それを國民の經濟生活の現狀に考へて、國民の負擔力や、その教育や、その保健や、乃至、

社會全般の諸制度や諸有る組織について、これを未前に防止するやうに、すべての經營を施行しなければならぬのであります。所謂社會政策的施設といはれる政策の實行の如きものが、この悪と不幸と禍とをとりのけるための國家の經濟策であるが、勿論、それだけでは不徹底であるので、社會改造論が唱へられ、資本主義經濟の破壊が論じられるわけでありす。しかし、どんなに社會は改造されても、經濟は變革されても、本當に人生から悪と不幸をのぞき、禍ひをとりのけることは、これは萬劫不可能の問題であります。それですから、まづそれに對する人々の思考する心持と、態度とを新たににして、たとひ、不幸は起りても、禍はわいてきても、それを軽く受けこむやうな寛大の心を養ふことをすゝめるのが、宗教の役割であります。これは決してあきらめ主義の態度ではないので、それを人生の必然的の事象として、むしろ科學的の因果關係として、自己身上のできごとに善處するのが、宗教的態度といふものであります。

近頃の傾向は、その人生の必然的な禍福の問題を、偶然のできごととしてそれを信仰によりてさげやうとしたり、得やうとしてゐるものが、頗る多いのであります。新しく起りた類似宗教の残らずが、人間の最も不幸とする疾病や、貧乏や、その他人生的不幸を神意にすがりて、取去られるかのやうに説きつゝ、多数の僞信者を集めてゐる所から見ても、いかに禍福の問題が、人間を悩ましてゐるかと理解されるのであります。科學がどんなに進んでも教育がいかに行なはれても、人生の幸、不幸の問題はとりさることもできず、また、あるがまゝに、それに安心することができないのか、微妙な人の心であります。私は現代の宗教を通して、遠慮なく、それを禍福中心の宗教といひ、信仰といはうと思ひます。

佛教の信仰は、あくまで必然的な因果法の上にたつてゐるといひながら、祈禱や加持を以て、人間の不幸を拂はふとするものもある。佛といへども因果の理法を無視することはできぬ。左右することはできぬとしながら、猶、佛に向て動かすこと

を祈願する。

定まつた業報は轉じられぬといひつゝ、業報に随順しきれない私のやうな念佛者も居る。現世の祈禱を禁じつゝ、しかも現世利益を説く矛盾もある。念佛の大功徳は、無量無數といひながら、尙ほ現世の壽福を求めやうとする。親鸞聖人は、信心さへ願ひ求むべきものではなく、それは、與へられ、回向される力だといはれてゐるのであります。

しかし、同情していへば、禍や不幸をのがれやうとして祈る心は、眞劍であります。勿論、眞劍にはちがひないが、それは純粹ではない、要するに自己のための願ひであります。如來を信ずる信心にさきだつて、如來の救ひの方が先きに手をとべてあるやうに、凡夫の不純の祈りにさきだち、要求に先手して、如來の大きい願ひが存在し、祈りが存在して居るとは、信じられないであらうがその大きい願ひがありてさへ、大きい祈りがあつてさへ、人の世の惡と、不幸と、禍ひとは斷へされ

ないのであります。我れらの凡小の祈りが、果してどれだけの効果をもたらすであらうか。ここに定業は轉ずべからず、因果は曲ぐべからず、方則是動かすべからずといった必然的の信念と、落ちつきとは起らないであらうか、これは已むなき、あきらめでもなく、苦しい忍受でもなく、たゞ是認する底の襟度であります。

思ふに禍福中心の信仰は、低劣の信であります。それは世の禍福に動かされないための信心を以て、禍福を求めするための道具に使ふからであります、禍福は多く主観の問題であります。禍福を受けることによりて、この世の業法が消滅されたと思へば、禍もまた、罪障の消へた尊い善巧の御方便ともいたゞかれます。古來の妙好人の事跡は、それを明らかに物語りてゐるのであります。

私どもは、勿論、禍福や不幸を感じずにはゐられないが、所謂轉重輕受の心をもつて、それを軽く受け流すことが、浮世の心がけでありたく思ひます。嚴格にいへば、禍が轉じて、福となり、惡が轉じて善となるのが、信仰の世界ではある

が、それまでにはならずとも、せめては、禍を受けてさらに煩惱をかさね、不幸を受けてまた罪を増すやうな、二重の罪禍を犯す事は、戒慎しなければならぬと念じます。是は所謂心の愚痴の煩惱であります。他力眞實の信心の人は、禍福を超越し天壽を超出して、すべては業報に打まかすべきことと信じたいものであります。

悲いかな、垢障の凡愚、無始よりこのかた助正間難し、定散心雜るが故に、出離其期なし。自から流轉輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども、佛願力に歸しがたく、大信海にいりがたし、良に傷嗟すべし、深く悲歎すべし、(化土卷)

世間の邪魔外道妖孽の師の妄りに禍福を説くを信じて、便ち恐動を生じ、心自から正しからず、卜問して禍を覚め、種々の衆生を殺して、神明に解奏し、諸の魍魎を呼で、福祐を請乞し、延年を欲求すれども、終に得ること能はず、愚痴迷惑して邪倒の見を信じ、遂に横死して地獄に入りて出期あることなからん。(化土卷引文)

されば國の災難をしづめ、身の不祥をはらはんとおもはんにも、名號の功用にはしからざるなり。たゞしこれは、たゞ念佛の利益の現當をかねたることをあらはすなり。しかりといへどもまめやかに淨土をもとめ、往生をねがはんひとは、この念佛をもて現世のいのりとおもらうべからず、乃至はからざるに今生の祈禱ともなるなり。(持名鈔)

## 眞宗は名號を中心とする

我が淨土眞宗は、何れの場合に於ても、まづすべての問題よりは、第一に本願の名號を中心の問題としますのであります。私のこの心の落ち付きが、よいか、わるいかは教の批判をまたなければなりません。如來の名號を中心とすることは、動かさない据りであると信ずるのであります。

それは何故かといへば、お淨土の存在は、過境の實在であり、如來の佛體は、我れらには不可見であり、我が人生のすべては、幻滅の悲哀のみであり、人間心そのもの、實相は、偽惡醜でありて、この解脱も解明も、結局は不可能であります。たゞ獨り本願の名號のみ萬古不易の存在でありて、常恒に不斷に、絶對から相對へはたらきかけてゐる常住の法身のすがたであります。しかも、それは我れらの無明の眼にも、耳にも、口にも、聲にも、心にも、明らかに見、明らかに聴き、明ら

かに信じ、かつ稱へしめられる如來のすがたであります。過境の存在の淨土も、不可見の佛體も、幻滅の人生のすがたも、この如來の名號をとほして、明らかに見聞きし、たしかに信知し得られるのであります。さらに刻實すれば、淨土も佛體も、この本願の名號の成就こそ、すなはち淨土の成就であり、佛體の成就であり、同時にそれは衆生の成就でもあつたのであります。衆生の成就とは、一切衆生をこのまゝまで救ふといふ如來の信心、そのもの、成就であります。

それは如來の眞實の本願といふものは、自己のためといふ意樂にあらずして、一切衆生のために、如來が名號となり、信心となりて、衆生に同心し、同化して、淨土へ迎へとらねばをかじといふ、如來の自己をはなれた絶對純粹の願行であります。

如來は、この名號によりて、絶對界から相對界へはたらきかけて下され、以て衆生をして絶對信の世界に安住せしめんとしたまふのであるから、名號はたゞちに絶

對そのもの、力用ともいへるし、または、我れらが相對界に居ながら、遠く絶對界の風光を信心の上に味しめたまう大悲の攝化ともいへるのであります。衆生はこの如來の名號を聞くことによりて、如來の悲心を知り、また衆生みづからの救ふべからざる所以を諒解せしめられる。それで聞くといふことは、信ずる義であるといはれる。信ずるといふことは、無義をもて義とすとも仰せられる、それはたゞ絶對の願力に信順するばかりであるから、義といふはからひの捨てられた素直な態度が無義の義なのであるとのことである。

無義とは、我れらの機受に於て、はからひのないことを意味し、義とは機受のはからひがやんで、すべては如來の御計ひに任かせきつた初後を一貫しての念佛生活の態度を示されたのであると思ひます。それはたゞ自然の願力によりて、自から然らしめられつゝ念佛生活せしめられるのである。

願ふに我れらの人生さへ計らひに従つては、その真相が得られないばかりでなく人生の眞實も得られないのであります。計らひの態度は、構へ心であり、粧ひ心であり、分別ごゝろであります。我れらの生活は、かういふ計ひによりて生活して居るが、この心をもつては、如來に信順し得ないのみではなく人生にも、自然にも、心靜かに順應されないのであります。人生に本當に生きるといふことは、如來の御計らひに、絶對のお計らひに、大宇宙の計らひに、すべてをおまかせして生きることであります。我れの外なるものゝすべてを、我れの計らひに従はしめんとすることとは、それが不可能であるばかりでなく、却て束縛と不自由の結果を産むものである。眞の自由と、無拘束は、我れをして一切のものゝ中に生かしめ、一切のこの中に信順せしめることであります。念佛の相續する憶念の生活とは、我れのほかなる一切のものゝうちに生きることではないが、逆にいへば、我れの裏に一切のものゝ生きることを素直に、快く承認することではないか、それは如來の名號が、一切衆生に同心して同化して、救はねばをかじといふ大悲心のすがたを、我れのうち



に髣髴せしめ、自由と無拘束の念佛の大道の一筋を、我れに實踐せしめるすがたではないかと思ひます。

本願の名號は、我れらの生きる道までも、回向される大道であります。信心も回向なれば、生活もまた回向である、少し言ひすぎかも知れないが、げに名號こそ、萬物の總名とも、宇宙の實在とも、仰いで仰ぐべきものであります。本願の名號から、淨土眞宗は生れたのであるから、それは本願の宗教でありて、親鸞の眞宗ではないといふ聖人の御持言を信ずべきであります。本願の宗教、名號の信心、これこそ眞實の宗教であり、金剛の信心であり、我れらの行くべき白道であります。

淨土眞宗に於ける一切の問題は、それを本願の名號に歸納して、眞宗に於けるすべての諸問題を名號中心の問題に見直してこそ、そこに深大の意義があると思ひます。

是以説ニ如來本願ニ爲ニ經宗教一即以ニ佛名號ニ爲ニ經體ニ也 (教卷)

眞實信心、必具ニ名號、名號必不レ具ニ願力信心ニ也 (信卷)

そもそも南無は歸命、歸命のこゝろは往生のためなれば、またこれ發願なり、このこゝろあまねく萬行萬善をして、淨土の業因となせばまた回向の義なり。この能歸の心、所歸の佛智に相應するとき、彼佛の因位の萬行、果地の萬徳、ことごとく名號のなかに攝在して、十方衆生の往生の行體となれば阿彌陀佛即是其行と釋したまへり、(執持鈔)

一切善根莊嚴淨土といふは、阿彌陀の三字に、一切善根をおさめたまへるゆへに、名號をとなふれば淨土を莊嚴するになるべしとなり。(尊號眞像銘文)

されば名號につきて信心をおこす行者なくば、彌陀如來攝取の誓ひ成すべからず、彌陀如來の攝取不捨の誓ひなくば、また行者の往生淨土のねがひ何によりてか成ぜん、されば本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願といふ、このいはれなり、(執持鈔)

念佛は無義を以て義とす、不可稱不可説不可思議の故にと仰せ候ひき、(歎異鈔)

## 本願名號の現實性

上來、私は淨土眞宗は何にを中心問題として起つたかといふ質問を提げて、私自身のそれに對する答辯を求めた所、それはお淨土の問題が中心でもなく、人生が中心でもなく、人間精神の解脱も、無論、中心問題ではなく、たゞ阿彌陀如來の本願の名號が、まさしく淨土眞宗の中心問題として、一宗が教興し、宗意が傳統され、宗義が開展され、宗風が維持され、信心が傳持され、さらには眞宗學としての宗乘が振興して、學徒の學派、學轍が進歩し、分派して、現在の興隆を成すに至つたものと自から問ひかつ答へたのであります。

ふつゝかの私のこの答へは、たゞ自身の攝取不捨の宿縁を慶びつゝ、これまでに聞く所のまゝを叙べ、味ふ所の旨をしるしたにすぎぬが、時代の推移と進展とに顧れば、問題の中心としての本願名號の人生に活きる現實感といふか、或は人

間の社會生活に於ける原理としての本願名號の現實性といふか、兎に角もつと人生的に、社會的に、その絶對の眞理と、慈悲の活動と、救済の力用とが、我が眞宗學徒によりて、しつかりと解明されなければ、本願の宗教としての絶對感は認められなくなるであらうと思ひます。

それはいふまでもなく、本願の名號が何にらかの形態を示して、この現實の不完全から救ふべく、迷から悟へ、惡から善へ、闇から明へ、偽から眞へと完全に進めるために、名號自爾の力用が作用されねばならないのであります。かくすることによりて、人生を中心の問題としない眞宗が、また心の解脱を中心としない眞宗が本願名號の作用によりて、そこに新しき人生と交渉し、人間心と關係を結びつけてくる名號の現實性としての人間救済と、社會匡救との可能性が認められるのであると思ひます。

すべての宗教の目的が人間の救済にあることはいふまでもない、また、不完全の

現實から、完全の理想へと向上せしめるのも無論であります。その救済の可能が名號に存するから、眞宗の問題は本願の名號が中心だと私は答へるのであるが、その名號は、人間の内部生活の要求のすべてに満足と與へることを名號の現實性としても、それだけでは人生社會の諸問題は説明され得ないといふのが却て現實の問題なのであります。

ありていに白狀すれば、現實に本願に救はれて居るといふ能感の信も、手に物を握つたやうな確實感があるのとは違つて、自然に本願に養なはれるといふか、或は薰習されるといふかの思ひのやうであります。また、名號の眞理性といつても、それと大きなかはりはなさそうに思ひます。それをすぐに生活の全面に益に立てやうとするのは、巧利的であり、正しくない考へだと古徳は戒しめて居るが、現代はそれでは満足しないで、是非その救ひといふものを現實につかまうとする、そこに新しい要求と古い教との衝突があると思はれます。

現代は眞理の遠大とか幽遠といふやうな漠然としたいひあらはしをさらう、何んでも科學的知識に根據して、論理的の解明を要求する、宗教的體驗から味ひ得たといふやうな説明では満足しない、是非とも知識によりて論理づけやうとすることが現代色のひとつであります。しかし、佛教でいふ智慧といふことは、われわれのもの、そうした知識の意味ではない。それは佛智の光明の力用から得られた實際の體驗を智慧といふのであつて、名號の眞理性は、自然にその智慧を念佛するものに體驗せしめ、薰習せしめるものであります。それはまた回向された信の具徳であるから、信心の生活は、たとへ漠然として居ても、おぼろげでありても、自然に本願力の薰習は、眞實の智慧を體驗して、偽から假へ、假から眞へと人生を開展せしめられるのであると考へられます。それは虚假はなれたる眞實の信心こそ、現實の問題を解明して、完全の世界へ到達せしめられる力なのであります。

この意味に於て本願の名號は、生活の原理としての道であり、人生向上の理想の

對象であり、現實救済の力であると讃仰しなければならぬと思ひます。またしても唯心的であり、觀念的であるといはれやうが、いづれの宗教も、そのひとつの特色として持てゐる力は、すべての問題を精神的に解決し、觀念的に認識することが宗教が私らに與へてくれる心的革命なのである、もし、それがなかつたら宗教としての役目は、根本の土臺を覆へすことになりません。

本願名號の自爾としての力用こそ、それは宇宙本然の力としてわれらを眞實に生かされる徳なのであります。念佛の生活が僞から假へ、假から眞へと開展する所以は、虚假の人生がやがて、眞實の人生に向上すべく、念佛の宗教的經驗がもたらす所の人生となるからであります。それは、念佛の生活が、この不完全の現實を改革して、完全の道へと進ましめる謂はれてありて、それこそ本願名號の救済の力による現實の改造であつて、それは念佛の眞實の智慧がもたらした改革といふのであります。社會組織の改造といひ、その經濟機構の建て直しといふやうな物的

の改革も、畢竟は眞實の智慧を根據として體驗された心的革命から出發した社會改革でなければ、本當の改革ではないであらうと思ひます。

本願名號の現實性は、私らの現實社會の改造にまで、その本然の力が惠まれないければなるまいと思ふ。別の言葉でいへば、念佛者の生活が社會的に進展して、その改革を實現するならば、それこそ本願名號の本然の力用が現實の救済とあらはれたものといへるのであります。

私 はこれを往相回向の眞實のすがたと思ひます。念佛行者の信心決定以後の社會生活は、無論、報恩行の生活形態でありて、それが或は化他行に屬するものともいへる點に於ては、或は還相回向の一分のすがたであるとしてもさしつかへはないが、還相はまさしくは還來穢國の後であるとすれば、信後の化他行は、矢張往相回向の相だとしなければならぬのであります。往相は自利であり、還相は利他であるとの示に従へば、そこに聊か矛盾の嫌ひはあるともいへるけれども、淨土の大善

提心には、願作度生の徳があり、その徳を十分衆生に施して、ともに浄土に往生せんと願ふ意味に於ては、明かに信後の化他行としての生活は、往相中の回向の生活としなければならぬと思ひます。

それはいふまでもなく、浄土真宗に於ては、自信のほかには教人信はない、自利即利他であるともいへるから、自行のほかに化他の思ひはないはずであります。化他すべきための化他ではなく、眞實の自行ならば、それが任運に化他となるのでありて、それが本願名號の本然の力用なのであります。この意味に於て、われらは終生所化であり、求道者である、布教者を以て任ずべきでなく、能化者を以て居るべきではありません。たゞ念佛申す所に、一切人の心的改造があり、従つて社會改造があり、國家革新がある。それは本願の名號が現實に一切を正しく生かしめんとする本然の作用でありて、それこそ皆共成佛道の往相回向なのであります。

涅槃をば滅度といふ、乃至佛性といふ、佛性すなはち如来なり、この如来微塵世界にみち／＼たまへりすなはち一切羣生海のこゝろなり、この一切有情の信に方便法身の誓願を信樂するが故に、この信心すなはち佛性なり、(唯信鈔文意)

還相利益、顯利他正意、(本典)

大行者、則稱無碍光如来名也、斯行即是攝諸善法、具諸徳本、極速圓滿、眞如一實功德寶海、故名大行(行卷)

わが身の往生一定とおぼしめさんひとは、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、お念佛こゝろにいれまうして、世の中安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべし。(御消息)

浄土の大菩提心は、願作佛心をすゝめしむ、すなはち願作佛心を度衆生心となづけたり。度衆生心といふことは、彌陀智願の回向なり、回向の信樂うるひとは、大般涅槃をさとるなり。(和讃)

還相利益、顯利他正意也 (證卷)

## 異安心の問題

真宗教團の信仰ほど、その全分の義趣を表現するのに最も困難のものはあるまい、また、その信相の形態に就ても、多面的なものはあるまい、従つてそれを毫末も誤りなく最も適切に明確にいひあらはすことは、頗る難き事であらう。

勿論、内部體驗の全幅を文字言語にあらはすのは、何によらず六ヶ敷い。言葉のいひやうや文章のあやを捉へて、彼れ此れと批議するのは、輕卒の態度である。そこには深い省察と、嚴かな審議が交はされることを至要とする。

それにもかゝらず真宗教團ほど異安心問題の多いものはない。私は敢て真宗教團の信仰といふ。

この異安心の多いのは、教團の權威の失墜したためか、それとも傳統信仰の失墜

したせい。或はそれは傳承教權に背く自由思想とか、個人思想とか、擡頭したためか、どうも傳承教權が失墜したとは見られない。正統信仰が動搖したとも見えない、まして自由思想が跳梁したとも見えない。そこには却て教團としての強い權力が儼として存在するのが見られる。

この權力の存在が、宗學と信仰の、兩面を最も組織的に、體系的に統制して、學と教とを統一するならば、異安心問題は多少は緩和せられやう。しかし、真宗教團の信仰は餘りにも多角的な特異な内容を有つ。未來往生も現在安住も、救ひの法にも救はれる機にも、多種多様の解釋が内容され、説明の表現も幾多存在する、従つて異安心問題の續出は、いかに教團の信仰が多面的に特異の存在であるかを物語つて居るといへる。

いふまでもなく他力の信仰も主觀の事實として、一應は許されてある。しかし、嚴密に再吟味すれば、それは自己なる機上の主觀の事實ではなくして、客觀とし

ての法の存在が救ひの事實となりて、衆生の主観にあらはれてきた本願の力用だといふこの機法両面の關係に見ても、その特異性が伺はれる。しかもこの機法の主客兩観は永久の對立にあらずして、つひに主観を泯して客観に合一される特異の内容をもつた境地を他力信仰といふ。

かうした特異性に富むる他力信仰の主観の内容を堂々として表現することに主観の困難を感じ、もしくは権力の重壓を感じずることは、教團としても同感せねばならぬ。いはんや他力信仰の救ひの重點を未來といふもよく、現在といふもよく、往生ともいふべく、信仰ともいはれる両面の根據が、願文と成就の文との兩方に見られるやうな特殊の他力信仰を、互に一方に偏局して、相互の論評を上下することは信仰に生きねばならぬ、教團人としても、慎重丁寧の態度があつて欲しいと思ふ。

## 二

特殊性に富む他力の信仰は、まづ機法の對立から、その合一へと進まねばならぬ。

これを機法一體の名によりて示されてはあがあるが、その一體は先天的一體でないといひ、本來一體であるともいはれる。特殊性は、これにとどまらず、この機法の對立に於て、一は救はれざる自己の機に深く徹せよといひ、他は救ひたまふ法の尊とさを深信せよといはれる。これは有名な善導大師の二種深信と稱せられる他力信仰の根本原則である。

論理としては或は矛盾を感じるであらう、主観の事實としては、その矛盾があるがまゝに我が内面に調和され、體驗せしめられる、そこに他力救済の特殊性が高められる。それはむしろ矛盾の調和といふ方が、内部體驗に深い意義を感じしめるであらう。

願ふに、眞宗教團の異安心とはこの矛盾の體驗に調和を失つた偏見ではないであらうか。淨土門他力の信仰には、彼岸の世界へのあこがれを重要な内容とする。それは十八願文に於ける若不生者、不取正覺のやるせない誓約である。この願文に據れ

ば、本願の信仰は、現實の道でない。人生の慰安でない、偏へに彼岸の世界への道である。所謂涅槃滅度することを以て救済の内容とする。別言すれば死後の往生こそ全き救済である。それは法藏因位の願心だからである。

しかるに成就の經意によれば、それは聞名信喜の救済でありて、彼岸の滅度の救済ではない。それは信の一念に内容する即得往生、住不退轉のお助けである。これに従へば信仰即救済といへる。前者は彼岸を内容とし、後者は此岸を内容とする。

一は滅度の喜を得、一は正定聚の悦を得る、論理は矛盾しつゝ實際の信相はよく調和し得る、それが他力信仰の妙用であらう。柄鑿相容れぬやうな機法二種の信相が無疑の一心に鎔融されるやうに、この因願と成就の、現在と未來との救済の矛盾は、救はれた喜びと救はれるであらうする悦びとが同様に調和する。

されば一を未來偏重と貶し、他を現在偏重と批することは、それこそ矛盾の論理に囚はれて一心の調和を失つた偏見的異安心ではないか。

勿論、この因願と成就に根據する信仰の二系統は、古來から幾多の論評がかさねられたといふ。それは本願と名號との二の形式に囚はれた偏執でありて、事實としての信仰には、彼岸のあこがれと、此岸のよろこびとが、渾然として調和されてゆく。

それは言ひかへれば、未來と現在と理想と現實との調和でありて、それがために我親鸞聖人はどんなに苦心されたであらう。

眞宗教團に於ける他力信仰の特異性は、まさしく氷炭相容れざる矛盾が、よく一心に調和し、體驗される所に不可思議の生命が躍動して居ること、確信せねばならぬであらう。學者は、それを佛心が凡心に一體となりて活躍したまふすがたといはれる。

## 三

教團に頻出する異安心の問題は主觀的には論理の矛盾に一心の調和を失つた偏見



であるといつた。更に客觀的に考察すれば、それは教團に於ける絶對の宗意の統一が失はれ、而してまた、學としての宗乘なるものに、組織がなく、體系がなく、脈絡がなく、秩序がなく、發達の經路をたづねる歴史の研究がないからである。従來の宗學は、天台、日蓮の諸宗と西鎮二派とに對する學であつた。現代の學としては科學があり、哲學があり、乃至現代思想と稱するものもある。宗學の權威は對內的から對外關係に進むを要する時だ。それは信仰の内容にも突き入つて研究すべきことだと思ふ。

勿論、宗意は不變としても、學としては討究の自由が昔から爲されて居る、この意味に於て不變の宗意をいよいよ統一すべく、新しい宗學の研究と建設は教團の學匠の責務とする、この統一が明確にされれば、異安心の問題は容易に批判される。しかも教團の現状は、淨土門としての中心思想が何れにあるかさへ、明瞭な統一的思想がない。

本願に於ける信願行の三要點が信樂に統一されることは、動かせない宗意でありながら、猶三業惑亂の法難は起つた。今、淨土門の中心思想は、唯ひとつの願生淨土のあこがれに限るといふ一心の調和を失つた偏見さへ、時としては強調するものがある。

聞名信喜の體感は、教團信仰の生命ではないか、誤つて願生中心の信仰ともなれば、不變の宗意は崩壊する、崩壊は分裂から起る、信仰の分裂は教團の崩壊ともならう。恐るべきことである。

願ふに多くの異安は、中心の思想を失なつた無統一の思想の分裂から起る。それは不變の宗意を自解し、縦まに自由の見解を試みようとするから起る。その一例としては、教團の青年教徒が餘りに現代の思想に迎合すべく淨土往生の思想を、現實に結びつけるべく力説することである。

それは現實に生きる生活力の充實こそ往生の生の意味だと歪曲して、世の歡

心を受けようとする。現實追隨の思想も、これまた異安心の一である。教團の任務は勿論現實人生の指導にある、しかも現實の指導は、現實に追隨しては、獨自自主の指導にはならぬ。時には敢然として現實に反抗し、時代精神と戦はねばならぬ。昔の聖者巨匠が却て時代精神の反面見でもあつた歴史を回顧すると、その毅然たる態度にひれ伏せねばなるまい。眞に時代を指導するものは、時代を超越する。この意味に於て現實にのみ阿付する教團は自信のない存在である。

私は最後の言葉としていふ、宗意の統一を持たない教團は、見様によりては教團人の自信に強い有力者のすべてが異安心者に見えるかも知れない。また見様によりては、すべてが正しいものと見えるかも知れないが、いづれにしても教團としての権力を以て、それに臨むことは慎むことを要する。

別言すれば教團としての學轍を中心權威として、その他の學轍を排するのは、極めて不當の態度であり、教團としての學に忠なる所以ではない。

昭和十一年八月八日印刷  
昭和十一年八月十日發行

定價 金拾五錢

著者 柘植信秀

編輯兼發行者 飯塚哲英

印刷所 佐藤勤彌

印刷者 中央佛教印刷部

東京市牛込區市ヶ谷佐内町三八

不許複製

發行所 東京市牛込區矢來町二番  
振替東京三七一六一番  
中央佛教社  
電話牛込二一八五番

終

